様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：３２７０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ１６７１８

研究課題名（和文）美術批評から見たフランス象徴主義の言説の場の再編成

研究課題名（英文）Reorganization of the field of French symbolism discourses from the point of view of art criticism

研究代表者
熊谷　謙介（Kumagai, Kensuke）

神奈川大学・外国語学部・教授

研究者番号：２０５８３４３８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：象徴主義における美術と文学との関係は、一方で伝統的な姉妹芸術という観念や照応の美学を温存し、他方でモダニズムを予告するように、相互に分離し自律した関係を目指すものであった。とくに後者に注目することで本研究が明らかにしたのは、神話や文学的物語への依存を脱却し、描く対象を記号へと還元していくという形式主義的な側面だけではない。抽象（脱神秘化）の後に起こる「記号群の再構成」による世界の再神秘化であり、ゴッホやゴーギャンのようなポスト印象主義やナビ派、アラベスクに象徴される同時代の装飾芸術や、広告などのグラフィック・アート、そしてマラルメをはじめとする象徴主義文学の再解釈の可能性を示す美学である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
今まで一致や照応関係を強調されてきた美術と文学の関係について、両者がともに花開いたとされるフランス19世紀末においても、実際には対立や葛藤などを含みこんだ複雑な関係であることを明らかにした。これは、社会に対する芸術全般の意味を考える上で無視できない側面であり、また両者の比較から導かれた象徴主義の再構成の美学は、神話的モチーフという伝統的な側面も備えつつ、20世紀以降、「引用」や「モンタージュ」という形で全面的に展開される芸術の現代性を導くという点で重要である。

研究成果の概要（英文）：The relation between art and literature in symbolism results from the “sister arts” idea and Baudelairien correspondence, as well as from the modernism schema: separation and autonomy. Focusing mainly on the latter side, this research clarifies not only the formalist aspect according to which the art breaks away from myth and literature story, reducing object to signs (demystification). However, it shows also the process of restoring mystery to the world by means of poetic of “re-composition of signs”, prefiguring the aesthetic of Post-impressionism (Gauguin, Gogh), Nabi, decorative art (“arabesque”), graphic art, and Symbolist poesy (Mallarme;, Laforgue).

研究分野：フランス文学、表象文化論

キーワード：国際情報交換：フランス、ベルギー　美学　哲学　世紀末　社会思想　アナーキズム　文明　構成

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

世紀末における美術批評の調査は、文学研究・美術研究の双方において見られるものの、目的を異にするため両者に乖離が見られることもしばしばであった。多く文学者によって担われた美術批評において、文学研究側は絵画に文学作品の反映を見る、いわば挿絵として見る傾向があった。

とくに、文学と芸術の一致する点を強調し、対立も含むような相互作用のダイナミズムが隠されがちであるという点は、現在もなお見られる傾向である。こうした固定観念については、例えばダリオ・ガンボーニのルドン研究（『「画家」の誕生』など）によって修正が図られているが、本研究はこの流れに掉さすものである。

一方、文学固有の象徴主義についての研究は、現実を描写するレアリスム・自然主義に対して、夢想や想像の世界を喚起する観念主義・ロマン主義という図式がいまだに根強いように思われる。

研究代表者は、世紀末文学・思想における無意識の概念の研究を長く行ってきたが、それはこのようなレアリスムと観念主義という二項対立を再考することを目的としていた。今回、美術という観点を提示したのは、レアリスムに当たるとされる印象主義・新印象主義と、観念主義に当てられる狭義の象徴主義の間に、後期印象派（ゴーギャン・ゴッホ）、ナビ派、ルドンといった位置づけが曖昧な存在が見られるからである。

この時代の批評家たちは、こうした画家たちをさまざまな形で分類しつつ、文学を論じるときには使わない言葉によって、「新奇な」芸術に立ち向かってきた。そこには**レアリスム／観念主義という対立を超えた言説**も見られる。本研究は美術批評の言葉を文学の場に引き戻すことによって、世紀末の文学場を再編成することを目指すものである。

研究代表者はマラルメが 1880・90 年代に書いた芸術論・社会批評の読解から、近・現代における芸術と共同体の関係について歴史的分析を行い、『マラルメによる祝祭 *La Fête selon Mallarmé*』をフランス語により出版した。本研究は、これを基礎としつつ美術批評にも注目することで、**抽象化という動きに潜む無意識や自然の存在**について考察する。それは同時に、**本能や野生の発露に見える芸術作品の中に、引用や構成の詩学が隠れている**ことを明らかにすることでもある。

またその背景としてあるのは、ピエール・シティが『デカダンスに抗して』で提示した、自由詩に代表されるような個人主義、自由主義に特徴づけられる 1880 年代から、自我を包む無意識や群衆、自然、生に特徴づけられる 1890 年代へというパラダイム変換の図式である。この図式の是非を、本研究の観点から確認することは、世紀末美学の刷新へとつながる。

まとめると、本研究は①無意識についての分析、②マラルメ研究というこれまでの予備考察を踏まえ、**世紀末美術についての批評言説を分析することで、マラルメをはじめとする象徴主義文学を、無意識的イメージとそれらの「再構成」という観点から読み直す**ことを狙いとする。本研究によって象徴主義が再評価され、20 世紀初頭の詩学や美学（シュルレアリスム、フォーヴィスム、キュビスム）を導くような、現代性のもう一つの歴史の存在が浮かび上がることが期待される。

２．研究の目的

研究代表者は 2011-14 年度にわたり、マラルメをはじめとする象徴主義の文学者・芸術家における無意識をテーマにして研究を遂行してきた（若手研究（B)「マラルメと象徴主義を中心とする無意識の詩学の生成とその展開」)。本研究はそれに引き続いて、このような無意識が象徴主義においてどのように表出されたか、美術批評を中心に考察して、美術と文学という二つの領域の横断を試みる。そして世紀末の美術についての言説の分析から、マラルメを中心として提示された象徴主義美学の再定義を目指す。

本研究の実現により 19 世紀末の文学研究・美術研究・思想研究に寄与することを目指しているのは、以下の二つである。

(1) 文学と美術の間の対立も含みこむ相互作用関係を明らかにし、現代性の歴史の読み替えを図る。
(2)「無意識」と「構成」の観点によって「象徴主義」像を刷新する。

今まで、「生」や「本能」という言葉は、観念の世界に閉じこもる象徴主義という枠組みでは位置づけが難しいものであった。本研究では、**同時代の社会において姿を現しつつあった群衆の魂、人間の奥底にある魂を作品の中に表現させ、「構成」の原理によって統御した最初の芸術運動こそ象徴主義**であり、世紀末美学の主調であったことを示す。

３．研究の方法

美術批評を見ることで、象徴主義の言説の場を編成しなおす――、この目的を実現すべく、本研究は３つの計画で構成された。

(1)マラルメの美術批評の読解と、同時代の芸術家や視覚文化との関係から見た、マラルメの作品の分析
(2)1880・90 年代の美術についての言説の収集・分類・読解
(3)後世に「ポスト印象主義」（ゴッホ・ゴーギャンなど）や象徴主義、ナビ派と分類される画家たちを論じた同時代評の検討

(1)についてはマネ、ルドン、セザンヌとマラルメの関係についてすでに論じており、その実績を元にしてナビ派の言説を中心に分析を進める。(2)については著作『マラルメによる祝祭』の準備で、また前回の「無意識の詩学」についての研究で、すでに調査を開始しているため、コーパスの作成の方法について習熟している。(3)については視覚資料を充分に確保しており、表象分析を進められる。したがって 4 年の期間内に研究計画を十分に完了できるようにと考えた。

３つの計画の具体的な作業は以下のとおりである。

(1)マラルメが記した美術批評だけでなく、画家たちの交流をたどるために、書簡や同時代の証言の読解を進める。また『賽の一振り』に代表される視覚詩の位置について、同時代の視覚芸術との関連から考察する。前者についてはとくにマラルメとナビ派の関係を調査する。たとえばヴュイヤールは最晩年のマラルメにとって重要な画家である。ヴュイヤールがしばしば主題とする部屋の表象は、マラルメの部屋の詩を想起させるものである。マラルメと 1890 年代のナビ派においてキーワードとなる、「内なるもの」「（再）構成」「アラベスク」を軸に分析を進める。

(2)フランス 19 世紀末を代表する文芸雑誌のうち、『ルヴュ・アンデパンダント』『ルヴュ・ブランシュ』、『ラ・プリュム』、『メルキュール・ド・フランス』における美術批評・時評を集めた、日仏両言語によるアーカイブを制作する。論考のタイトル、執筆者名を検索できるようにすると共に、テーマ別に集め解説をつけることで、1880・90 年代の美学の言説空間を明らかにする。

(3)世紀末を代表する美術批評家のテクストを集め、イメージの「構成」の観点から読解する。フェリックス・フェネオン（『1886 年の印象派の画家たち』など）、アルベール・オーリエ（『絵画における象徴主義』など）、アンドレ・メルリオ（『絵画における観念主義運動』、ルドン論など）に特に注目する。

４．研究成果

研究成果として、各年度の成果を示した後に、4 年間の研究で解明されたことを要約することにしたい。

2015 年度

アルベール・オーリエの美術批評など、世紀末美術についての言説の読解を進めた。ベルトラン・マルシャル『サロメ』の翻訳も始まり、言語表象と芸術表象の交差する神話的形象についての第一線の研究を日本に紹介する作業も進めている。

また 2014 年度までの研究課題の延長線上として、世紀末の女性作家ラシルドの読解・翻訳を進め、『自然を逸した者たち』の抄訳と「アンティノウスの死」の全訳を、『古典 BL 小説集』に発表した（2015 年 5 月）。さらに、女性の身体表象をテーマとした「身体の「自律」から「関係」の身体へ―アニエス・ヴァルダ『歌う女、歌わない女』をめぐって」を研究発表し、『〈68 年〉の性－社会の変容と「わたし」の身体』に同名論文を寄稿した（2016 年 2 月）。分析対象は 20 世紀であるが、女性の身体的「自由」や裸体表象といったテーマは、世紀末美術の枠組みの研究から出発したものである。

最後に、神奈川大学非文字資料研究センターから『18 世紀ヨーロッパ生活絵引』を刊行し（2015 年 12 月）、「『パリは移動祝祭日』－18 世紀パリの民衆的祝祭空間を中心に－」を公開研究会（2016 年 3 月）にて発表した。これも時代は異なるものの、都市生活の視点から視覚資料を分析したものであり、ローデンバックの『死都ブリュージュ』やヴェラーレン『触手ある都市』など、世紀末文学の都市表象を考える視点にもなった。

2016 年度

日本フランス語フランス文学会 2016 年度秋季大会において、「文学集団の詩学」というワークショップを組織した。世紀末文学を専門とする 3 人の研究者の発表をコーディネートするとともに、「マラルメと師弟のまじわり」という発表を行い、2017 年 3 月に同名論文を発表した。言説を集団の中で流通させることで、文学者・芸術家が商品化の時代をどのように生きのびるのか、という視点を提出できたと考える。

また、311 などの災害や相次ぐ「テロ」の時代にあって、カタストロフィー後の都市を歴史的に考える論集、『破壊のあとの都市空間－ポスト・カタストロフィーの記憶』を 2017 年 3 月に出版した。全体の編集とインタビュー、全体の理論的枠組みとなる前書き・序論の執筆に携わるとともに、1871 年のコミューン後のパリの荒廃について論じた（「パリは燃えているか？－パリ・コミューンの廃墟をめぐって」）。文学者の言説だけでなく芸術家によるコミューン表象に注目して、19 世紀後半フランスの文化的状況を分析するという点で、本研究課題との関わ

りも大きい業績である。
　最後に、神奈川大学非文字資料研究センターにおいて「『パリは移動祝祭日』－18 世紀パリの民衆的祝祭空間を中心に－」を査読論文として掲載するとともに（2016 年 11 月）、二つの国際シンポジウムで「『18 世紀ヨーロッパ生活絵引』から見る都市の祝祭空間」（浙江工商大学共催）、「写真のポスト・トゥルース性－非文字資料としてのパリ・コミューン表象」（台湾大学共催）を発表した。都市や写真といった近代の重要なモチーフを、フランス研究の外部にいる研究者に向けて伝えることで、フランス固有の枠組みを相対化し、今後、世紀末表象をより大きな視点から考察するきっかけとなった。

2017 年度
　2017 年 7 月に行われた第 11 回表象文化論学会（アーツ前橋）パネル「萩原朔太郎の表象空間―その百年」において、「青猫・以後」と郷愁―「のすたるぢや」の歴史性」と題した発表を行った。萩原朔太郎におけるボードレール・フランス象徴詩の遺産を、挿絵といった視覚表象などの関係から考察するという点で、本研究課題と深い関係をもつものである。「政治の美学化」に関するコメントを踏まえて同年 12 月に論文を発表した。
　また、神戸大学で 2017 年 12 月 16 日－17 日に行われた、マラルメ・シンポジウム 2017 において、「詩句の危機から再構成の詩学へ－『ディヴァガシオン』と『賽の一振り』を結ぶもの」と題した発表を行った。『賽の一振り』という図形詩の歴史的作品を、デカダンスの風潮や同時代の自由詩論議という文脈、そして視覚性の観点から再検討する試みであった。
　最後に、大学発行の雑誌としては著名である『神奈川大学評論』の第 88 号に、「ジャンヌ・ダルクからジュピターへ―戦後フランスの男性権力表象」と題した論考を発表した。女性表象ではなく男性表象というまだあまり分析されていない主題をめぐって、トランプ大統領就任などアクチュアルな問題と接続させることで、フランスにおける表象研究を一般の読者に紹介するとともに、ミソジニー（女性嫌悪）表象と男性支配的な言説が流通していた 19 世紀末の文学場・芸術場を考察するための事例研究となった。

2018 年度
　2018 年 10 月に行われた日本フランス語フランス文学会 2018 年度秋季大会・ワークショップ「近代フランス美術と文学―その照応と対立のダイナミズム」において、「ペンで描かれた「象徴主義」－アルベール・オーリエの美術批評から」と題した発表を行った。本研究の要点となる、世紀末美術と象徴主義文学の言説の関係についての考察である。オーリエの批評におけるボードレールからの引用を新たに指摘したうえで、2019 年 3 月に論文を発表した。
　また、2018 年 9 月に行われた「マラルメ・シンポジウム 2018」において、「マラルメの詩の「縁語」について －≪ 密雲の低く圧しかぶさるあたりに… ≫を中心に」というタイトルの発表を行った。マラルメの難解といわれる詩を、和歌の技法である「縁語」という概念を援用して分析する試みであり、象徴主義詩読解に新たな視点を提示することを狙ったものである。本発表を土台にして、2019 年 3 月に論文を発表した。
　さらに、2018 年 12 月に「ミシェル・ウエルベックとユイスマンス――『服従』における《女性嫌悪》をめぐって」と題する論文を発表した。イスラーム教の表象をめぐって論議を呼んだ『服従』の主人公が、世紀末の作家ユイスマンスの研究者であることをきっかけに、両作家の関係を女性嫌悪と食卓というテーマから論じたものであり、世紀末文学解釈の刷新を目指した。
　これ以外にも、哲学者カンタン・メイヤスーのマラルメ論（『亡霊のジレンマ』「『賽の一振り』あるいは仮定の唯物論的神格化」）を翻訳し、昨年度発表した後期マラルメ論を論文とした（「詩句の危機から再構成の詩学へ－マラルメ『ディヴァガシオン』と『賽の一振り』を結ぶもの」）。2018 年 12 月には、岩手大学国際シンポジウム「証言の時代とそれ以前」にて、「「無常」から「非情」へ―カタストロフィーを語る堀田善衛」と題した発表を行い、戦後日本文学をフランスに紹介する試みを行い、論文として発表した。

　研究開始時に提示した 3 つの研究計画について振り返りたい。
　(1)マラルメの美術批評の読解と、同時代の芸術家や視覚文化との関係から見た、マラルメの作品の分析についていえば、直接にはマラルメの美術批評を分析する論文は提示できなかったが、視覚詩『賽の一振り』や、そこで全面的に展開する意味の輻輳性を分析する論文（「**詩句の危機から再構成の詩学へ**」「**マラルメの詩の「縁語」について**」）、そして革新的な『賽の一振り』論の翻訳など（**『亡霊のジレンマ』**）、数多く発表することができた。またマラルメと後輩詩人の関係によって織りなされる文学場の意味を分析した論文は、美術場においても適用が可能な視点を提供しており、さらには文学場と美術場の相互承認と葛藤の問題の土台となるものであった（「**マラルメと師弟のまじわり**」）。
　(2)1880・90 年代の美術についての言説の収集・分類・読解についていえば、収集・分類については進めたものの、読解についてはアルベール・オーリエの美術批評についての論文にとどまり（「**ペンで描かれた「象徴主義」**」）、目標であった日仏両言語によるアーカイブの構築は研究期間内に果たすことができなかった。研究期間後にも進めていくと同時に、日仏の世紀末研究者との共同研究・作業も検討することで、早期の実現を目指したい。
　(3)後世に「ポスト印象主義」（ゴッホ・ゴーギャンなど）や象徴主義、ナビ派と分類される

画家たちを論じた同時代評の検討については、オーリエ論で正面から扱った（「**ペンで描かれた「象徴主義」**」）。現在では異質とされるこれらの流れをすべて含みこんだ形で論じたオーリエが提示したのは、形式主義にもレアリスムにも還元されない、イメージ群の再構成という美学であるという論は、文学研究・美術研究の両面で大きな問題提起を果たしたように思われる。

また研究期間後にはなるが、新印象主義を提示したフェリックス・フェネオン、ルドン論を残したアンドレ・メルリオについては、彼らの美術批評を分析する予定である。

最後に、本研究課題「**美術批評から見たフランス象徴主義の言説の場の再編成**」について、再検討された象徴主義の刷新された姿とは結局のところ何であるのかを要約したい。

文学（詩）と絵画は長らく姉妹芸術という関係を理想としてきた。19 世紀においても、ボードレールは諸感覚の「照応」の美学を打ち出し、同タイトルの詩のヴィジョンを超え、ワーグナーの総合芸術やランボーの「母音」の共感覚などの概念と連動しながら、19 世紀後半の文学・芸術の主調となる考えとなった。他方、19 世紀後半は同時に文学・芸術の「自律」の時代とみなされている。ブルデューは『芸術の規則』において、ボードレールやマネ以降の作家・芸術家を題材として、芸術場の「自律」という見取り図を提示して大きな反響を得た。この図式は歴史画や神話画からの脱却をはかった印象主義の道のりと重ね合わせられ、19 世紀後半以降の芸術は、同時代の社会から分離しただけでなく、既成の物語からも「自律」したものとして論じられる。

一方で伝統的な姉妹芸術・照応の美学、他方でモダニズムへと向かう文学と絵画芸術の相互自律――、本研究が対象としたのは、これら二つの動きが交わる 19 世紀末の文学と芸術の関係、そしてその中間領域ともいうべき美についての言説、とりわけ「象徴主義」についての美術批評である。

これまで象徴主義芸術は文学や神話の参照という観点から、ある種文学に仕えるものという役割を与えられてきており、モダニズム的美学からは「退行」とみなされることも多かった。しかし実際には、文学作品の挿絵を多く残し、文学的な解釈を多く受けてきたルドンが、文学の側からの回収を拒絶してきたことに示されるように、文学場と美術場が接する地点には、葛藤や対抗関係も見ることができる。「絵画における象徴主義」を書いたアルベール・オーリエにも、タイトルに端的に示されているように、文学的象徴主義の美術への導入を主張しているのであり、画家たちの反発を招いたことも事実である。

しかしこのような対立を通して世紀末という時代を再検討することで、文学における象徴主義を検討するだけでは見えてこなかった、象徴主義の新たな側面が見えてくるのではないか。象徴主義が意味するのは、一方では対象を記号へ還元とする美学であり、観念主義的側面が強いことは無視できない。他方で、たとえばオーリエはこうした記号をどのように配置するかという「構成の詩学」を提示している。これはとくにナビ派に顕著な、広告などのグラフィックデザイン、装飾芸術やアラベスクといった問題圏とつながる。ナビ派を代表するモーリス・ドニに、「一枚のタブローとは、軍馬や裸婦、或いは何かの逸話である以前に、本質的には一定の秩序の上に集められた色彩で覆われる平面である」という言葉がある。モダニズム・形式主義的な観点からのみ解釈されがちな言葉であるが、「構成の詩学」と重ね合わせるならば、**形式主義的な脱神話化の後に起こる、再構成による再神話化**を指し示すものであり、このプロセスこそが、形式主義も神秘主義も兼ね備えた象徴主義の全貌なのではないか。そこでキーワードとなるのは、伝統的な意味とモダニズム的な意味を兼ね備える、「記号」と「感覚」である。

このような象徴主義美学の再編成をめぐる仮説は、文学場の再編成にも光を当てるものである。マラルメの詩における日常（会話表現）と神話的形象はどのように結びつき、配置されているのか、ラフォルグにおける科学・宗教用語と日常言語の結合はどのような効果を生んでいるのか――、本研究により導かれたのは、「**記号群の再構成」としての象徴主義美学**であり、世紀末文学解釈の刷新の可能性である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　9 件。９以外すべて査読無）

１．熊谷謙介、「マラルメの詩の「縁語」について－［密雲の低く圧しかぶさるあたりに…］を読む」、『人文研究』（神奈川大学）、197 号、1-30 頁（2019/03）
http://human.kanagawa-u.ac.jp/gakkai/publ/pdf/no197/19701.pdf

２．熊谷謙介、「無常」から「非情」へ―カタストロフィーを語る堀田善衛」『岩手大学国際シンポジウム「証言の時代とそれ以前」報告集』、31-43 頁（2019/03）
https://irdb.nii.ac.jp/01335/0004038438

３．熊谷謙介、「ペンで描かれた「象徴主義」－アルベール・オーリエの美術批評」、『人文学研究所報』（神奈川大学）、61 号、31-43 頁（2019/03）。
http://human.kanagawa-u.ac.jp/kenkyu/publ/pdf/syoho/no61/6101.pdf

４．熊谷謙介、「ミシェル・ウエルベックとユイスマンス―『服従』における《女性嫌悪》をめぐって」、『人文研究』（神奈川大学）、196 号、3-37 頁（2018/12）。
http://human.kanagawa-u.ac.jp/gakkai/publ/pdf/no196/19602.pdf

5．熊谷謙介、「詩句の危機から再構成の詩学へ－マラルメ『ディヴァガシオン』と『賽の一振り』を結ぶもの」、『人文研究』（神奈川大学）、195 号、1-32 頁（2018/09）
http://human.kanagawa-u.ac.jp/gakkai/publ/pdf/no195/19501.pdf
6．熊谷謙介、「萩原朔太郎「青猫・以後」と郷愁―「のすたるぢや」の歴史性」、『人文研究』（神奈川大学）、193 号、1-35 頁（2017/12）
http://human.kanagawa-u.ac.jp/gakkai/publ/pdf/no193/19304.pdf
7．熊谷謙介、「ジャンヌ・ダルクからジュピターへ―戦後フランスの男性権力表象」、『神奈川大学評論』、88 号、113-123 頁（2017/11）
8．熊谷謙介、「マラルメと師弟のまじわり」、『人文学研究所報』（神奈川大学）、57 号、1-18 頁（2017/09）。
http://human.kanagawa-u.ac.jp/kenkyu/publ/pdf/syoho/no57/5701.pdf
9．熊谷謙介、「「パリは移動祝祭日」－18 世紀パリの民衆的祝祭空間を中心に」、『非文字資料研究』（神奈川大学）、13 号、1-18 頁（2016/9）。
klibredb.lib.kanagawa-u.ac.jp/dspace/bitstream/10487/14397/1/13-02.pdf

〔学会発表〕（計　9 件）
1．熊谷謙介、「「無常」から「非情」へ―カタストロフィーを語る堀田善衛」、国際シンポジウム「証言の時代とそれ以前」、2018 年 12 月 22 日、岩手大学
2．熊谷謙介、「ペンで描かれた「象徴主義」－アルベール・オーリエの美術批評から」、日本フランス語フランス文学会 2018 年度秋季大会・ワークショップ「近代フランス美術と文学－その照応と対立のダイナミズム」、2018 年 10 月 28 日、新潟大学
3．熊谷謙介、「マラルメの詩の「縁語」について －≪ A la nue accablante tu ≫を中心に」、マラルメ・シンポジウム 2018、2018 年 9 月 8 日、慶應義塾大学
4．熊谷謙介、「詩句の危機から再構成の詩学へ－『ディヴァガシオン』と『賽の一振り』を結ぶもの」、マラルメ・シンポジウム 2017、2017 年 12 月 17 日、神戸大学
5．熊谷謙介、「「青猫・以後」と郷愁――「のすたるぢや」の歴史性」、第 11 回表象文化論学会パネル「萩原朔太郎の表象空間―その百年」、2017 年 7 月 10 日、アーツ前橋
6．熊谷謙介、「写真のポスト・トゥルース性－非文字資料としてのパリ・コミューン表象」非文字資料研究センター2016年度第4回公開研究会「歴史研究と非文字資料研究の対話(2)–日本と台湾を事例に」、神奈川大学
7．熊谷謙介、「マラルメと師弟のまじわり」日本フランス語フランス文学会 2016 年度秋季大会ワークショップ「文学集団の詩学」、2016 年 10 月 23 日、東北大学
8．熊谷謙介、「『18 世紀ヨーロッパ生活絵引』から見る都市の祝祭空間」非文字資料研究センター・浙江工商大学東亜研究院共催シンポジウム「東アジアにおける非文字資料研究」、2016 年 7 月 2 日、浙江工商大学東亜研究院
9．熊谷謙介、「パリは移動祝祭日－18 世紀パリの民衆的祝祭空間を中心に」非文字資料研究センター第 3 回公開研究会「絵画にみる 18 世紀ヨーロッパの都市－『18 世紀ヨーロッパ生活絵引』出版を記念して」、2016 年 3 月 26 日

〔図書〕（計　4 件）
1．（翻訳）カンタン・メイヤスー、千葉雅也　（著）、岡嶋隆佑、熊谷謙介、黒木萬代、神保夏子（訳）、『亡霊のジレンマ』、青土社、2018 年、272pp（「『賽の一振り』あるいは仮定の唯物論的神格化」の翻訳を担当）、2018/06
2．熊谷謙介（編著）、『破壊のあとの都市空間』、青弓社、2017 年、366pp（序論、第 1 章、第 5 章、最終章インタビュー分を担当）、2017/03
3．山口ヨシ子、土屋和代、村井まや子、熊谷謙介、小松原由理、クリスチャン・ラットクリフ、『〈68 年〉の性 変容する－社会と「わたし」の身体』、青弓社、2016 年、256pp（第 4 章「身体の「自律」から「関係」の身体へ―アニエス・ヴァルダ『歌う女、歌わない女』をめぐって」を担当）2016/02
4．（翻訳）ラシルド、森茉莉ほか著、笠間千浪編、『古典 BL 小説集』、平凡社ライブラリー、2015 年、355pp（ラシルドの二作品（『自然を逸する者たち』、「アンティノウスの死」）の翻訳を担当）。2015/05

6．研究組織
(1)研究代表者
熊谷　謙介（Kumagai Kensuke）
神奈川大学・外国語学部・教授
研究者番号：20583438

(2)研究分担者　なし

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。